



TITLE:

# 学会抄録 日本泌尿器科学会第48回 近畿集談会

AUTHOR(S):

---

CITATION:

学会抄録 日本泌尿器科学会第48回近畿集談会. 泌尿器科紀要 1957, 3(4): 292-297

ISSUE DATE:

1957-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111436>

RIGHT:

## 学 会 抄 録

日本泌尿器科学会

第48回近畿集談会

昭和30年5月22日

於 大阪医科大学

1. 尿路炎に対するアクロマイシントリプルサル  
ファ治験 田村峯雄(大阪市大)2. アクロマイシンの泌尿器科的応用 前川正  
信, 橋本誠一(阪大)

急性淋菌性尿道炎9例, 慢性尿道炎4例, 膀胱炎4例, 腎盂膀胱炎1例, 急性副睪丸炎1例の計19例の泌尿器科感染症にアクロマイシンを用い, 慢性尿道炎の4例を除き充分な量のアクロマイシンの使用は有効であつた。使用量は急性尿道炎1~2~8g, 他の症例は4~8~20g。詳細は原著とする。

3. オロナイン軟膏による性病予防 稲田務,  
新谷浩(京大)

原著は泌尿器科紀要1巻3号214頁に掲載。

4. 新考案の膀胱鏡兼レントゲン検査台 中尾  
知足(大阪北市民), 浅野定(関西電力病院)

## 5. 尿道畸形の3例 大橋二郎(京府大)

第1例は11才の男子, 精阜の肥大に依り排尿障害を来したと思われる例。Sectio alta に依り精阜をelectrocoagulieren して排尿障害を解消させた。第2例は25才の男子, 夜尿を訴えレ線像に於て Spina bifida occulta, 尿道球部の狭窄, 後部尿道の著明な拡張及び精囊の非対称性を認めた。尿道拡張に依り治癒。第3例は64才の男子, 主訴は頻尿と排尿困難。高度の完全包茎あり, レ線像で尿道球部の狭窄, 後部尿道の著明な拡張及び肉柱膀胱を認めた。包茎手術と尿道拡張に依り治癒。

以上3例の尿道畸形に於て何れも Schrammsches Phänomen を認めたが上部尿路の拡張は証明されず, 第2, 第3例に後部尿道の著明な拡張を, 第3例に更に肉柱膀胱を証明した。

6. 尿管狭窄の症例及び尿管異所開口の1症例  
後藤薫, 酒徳治三郎, 片村永樹(京大)

## 1) 逆行性又は排泄性腎盂撮影によつて腎盂尿管像

を得ることが出来ないものに, 先に報告した経腰的(或は直接的)腎盂撮影法を応用して明確に尿管狭窄像を証明した。又下部尿管狭窄例では膈位膀胱撮影法を行つて, 狭窄部と膀胱との関係を明かにした。

2) 22才の女子, 正常尿道より正常な排尿を行いうると同時に, 尿道右後方0.5cmの腔円蓋前壁に週期的尿排出を認める尿管異所開口例を報告した。逆行性腎盂撮影法により右側完全重複腎盂並びに尿管を証明し, Sampson 氏法により尿管膀胱新吻合術を行つた。

7. 血尿を主訴とする畸形腎の1例 大矢全節,  
柳井哲雄(国立京都)

46才の男子に見られた畸形腎の1例を報告した。血尿を主訴とし他に泌尿器科的障害を認めず, 諸種の検査でも診断が確定せず, 開腹により畸形腎を発見した。本症の分類を考察し, 併せて血尿の成因等を文献上から述べた。

8. 妊娠によつて「イレウス」症状を起し, 手術  
によつて再妊娠が順調に経過せる非融合性交  
叉腎の1例 矢野登, 森幸夫, 小川一雄,  
大柳裕(三重医大)

23才, 妊娠三ヶ月の初妊婦, 腰痛, 嘔吐を主訴とし, 「イレウス」の疑にて入院したが, 両側逆行性ピエログラムにて左側の正常位置にある腎盂像とその下方に尚一つの腎盂像を見, 尿管像は双方が一線上に連つて見える。即右腎の左側交叉性腎変位なる事を知つた。人工流産にて症状消失す。半年後再入院, 両側尿管カテーテリスムス, 右側尿管内造影剤注入撮影にて下位腎は右腎なる事判明, プノイモ レトロ・ペリトネウムにて非融合性なる事を証明す。右腎を剔除, 手術時妊娠一ヶ月なりし事後日判明, 現在9ヶ月妊娠順調なり。術前神経痛様疼痛等の自覚症状も術後全く消失す。

### 9. 先天性左腎欠損症を伴える腎結核症例 三 国友吉, 平山栄一, (和歌山赤十字)

45才, 男, 主訴終末時排尿痛, 尿中結核菌陽性にして膿尿を呈す。膀胱鏡検査にて, 輸尿管間靱帯の左側隆起は欠如し, 僅かに溝状を呈し左尿管口を認めず。インデゴカルミン試験にて左は全く排出を見ず, 排泄性腎盂撮影にて右中腎盂像不鮮明, 左腎盂腎盞像は全くこれを認め得ず。後腹膜腔気体注入法にて左腎の欠如せるを確認す

### 10 重複腎結核の一例 (附 後腹膜気腫腎盂断層撮影) 門脇和敏, 宮垣信海 (大阪市大) 寿山龍男 (大阪市大レ線科)

我々は結核を合併せる重複腎盂兼完全重複輸尿管の患者に遭遇し, これに後腹膜気腫を施行し, 排泄性腎盂断層撮影を行った一例を報告した。この撮影法によりこの患者の腎盂は背部より右側 (健腎側) は, 5cm 左側 (罹患腎側) は 6cm で夫々鮮明像を得る事が出来, その前後に於ては不鮮明で腎盂像を得る事が出来なかつた。

### 11. 本態性腎出血の組織像に就いて 萩田敬次 (阪大)

### 12. 膀胱異物及び膀胱尿管結石各1例 稲田務, 多田茂, 宮崎重, 八田栄造, 村上仁勇 (京大)

1) 我々は性交前戯として hatpin を尿道内に挿入せる女子膀胱異物の1例を経験し, 高位切開により摘出した。

2) 56才の女に於て膀胱尿管結石を経験した。結石核として骨様の物質を認めた。

### 13. 多数の尿石を有せる膀胱結石症例及び尿石症 と過石灰尿について 佐柳太郎, 岡田敏 (大 阪警察)

1) 10数個, 全量80gに及ぶ尿石を有せる膀胱結石症の一例を報告。

2) 尿路結石と関係ありと思われる疾患例について Sulkowitch 氏尿中過石灰測定法を行った。(1) 尿路結石患者13例中38%に過石灰尿を認めた。(2) 長期臥床患者 (骨折, 脊椎カリエス, 脊髄膀胱) 25例中28%に過石灰尿を認めた。(3) 結石以外の尿路疾患では過石灰尿を来す比率は健康者のそれと略々同様であつた。(4) スルファミン剤内服患者では10例中40%に過石灰尿を認め内服前の10%より明らかに増加していた。(5) ティピオン内服患者は4例中全例100%に過石灰尿を認めた。総量は2900mg~5230mgであつた。

### 14. 7才の幼児に発生せる膀胱結石の一例 堀 辺四郎, 原省吾 (奈良医大)

7才の幼児の膀胱結石の1例を報告する。患者は1才頃より排尿困難あり, 血尿に気付きて来院。Sectio alta により2.5×2.1cmの結石を摘出, 化学的検査により尿酸塩結石と思われる。Operation は全身麻酔により行つたがラボナ200mg 術前30分服用, プチルカイン5mgを20%ブドウ糖にて溶解使用し, 疼痛其他不快なる術中, 術後の障碍なく手術施行出来た。

### 追 加 中尾知足 (大阪北市民)

余の経験で最年少者膀胱結石に手術をせるもの男子満3才で2例, 1例は碎石術により, 1例は高位切開で除去す。京大時代に6才の女子で高位切開によつたものが, 最近20年後腹壁の強度の瘢痕の為難産をしたと云はれた者が再診を乞ひ来院したが, 小児時代の瘢痕は大人になると甚しく大となるからやはり出来るだけ碎石術によるべきである。

### 追 加 石神襄次 (京大)

4才3ヶ月の男子にして尿閉を来して来院, 拇指頭大の膀胱結石なる事を認め膀胱碎石術を施行して治療せしめた1例を追加する。

### 15. 膀胱粘液癌の剖検例及び結石を合併せる Grawitz 腫瘍の1例 加藤篤二, 仁平寛 巳, 大森孝郎, 新谷浩 (京大)

1). 51才女子, 膀胱底部腫瘍により両側尿管口の閉塞, 両側腎水腫及び尿毒症を来し, 両側腎瘻術を行うも術後10日目に死亡, 剖検所見は高度の両側腎盂及び尿管拡張を示し, 膀胱三角部腫瘍は両側尿管口を閉塞, 管内性に尿管内に侵入増殖し上部に向つて米粒大の娘腫瘍が見られたが, 周囲臓器への浸潤にとぼしく淋巴腺転移を認めず, 組織学的に粘液癌の像を示した。2). 55才の男子, 4年前より時折無症候性血尿あり, レ線撮影にて左腎腫瘍及び結石との診断の下に腎切除術を行い, 腫瘍は組織学的に Grawitz 腫瘍にして拇指頭大の結石を合併した。Grawitz 腫瘍の結石合併例について文献的考察を行い, 更に両者の発生に関する関係について論じた。

### 16. 所謂 Grawitz 腫瘍の3例 外松茂太郎 (京府大伏見分院), 幹滋 (京府大)

1) 72才男子, 左側 Grawitz. 摘出腎は, 9.6×6.6×4.7cm, 130gで, 腫瘍に接して孤立性の囊腫あり,

此の囊腫形成の機転につき言及した。2) 56才男子、右側 Grawitz. 摘出腎は  $13.0 \times 7.5 \times 3.0\text{cm}$ , 220g で腎実質内の転移があり、之に言及した。3) 53才男子、右側 Grawitz. 摘出腎は  $11.0 \times 7.0 \times 5.0\text{cm}$ , 160gr で、術前X線像より腎盂腫瘍と診断したものである。組織像で定形的な Grawitz の像の他に、腺様構造、尿管より発したと思われる様な細胞の形及び排列を認めた。

#### 17. 原発性腎盂乳頭癌の1例 細田寿郎, 小形和太郎 (日生病院)

何等誘因なくして突発性無症候性血尿を主訴とする75才老婦に発生し、腎盂像に著明な造影剤欠損をみとめ、剔出腎により之が腎盂粘膜より発生し組織学的に乳頭状移行上皮癌の像を呈する比較的稀な原発性腎盂乳頭癌であり、術後乾燥血漿注射 ( $100 \times 3$ ) によると思われる血清肝炎を起し黄疸を発現した1例を報告した。

#### 追 加 多田茂 (京大)

二年來膀胱乳頭腫と云われていた54才の男子に右腎腫瘍を認め、手術によつて腎盂乳頭腫なることを知つた1例を追加する。

#### 18. 尿管腫瘍症例 乾滋 (京府大)

65才男子に発生し血尿を主訴とせる尿管腫瘍の1例を報告した。組織学的には腺癌であつた。興味ある点として腫瘍より両側に腹腔の後方に向い、胎生期の A. umbilicalis lateralis の遺残物と考えられる Strang が見られた。

#### 追 加 前田行造 (和歌山医大)

46才女、約6ヶ月前より軽度の血尿、排尿痛及び右下腹部より下肢へかけ神経痛様疼痛あり、5ヶ月前より尿の悪臭を認む。膀胱鏡により膀胱頂部に鶏卵大の腫瘍を認め、尿管腫瘍の疑いで中臍靱帯を含む膀胱部分切除術を行つた。摘出標本は尿管腺癌であつたが、ムチンの分泌は軽度であつた。本症例は本邦に於ける尿管癌に於ては第16例目と思う。

#### 質 問 中尾知足 (大阪北市民)

尿管腫瘍の場合の転移は何処に来るか。かつて京大から井上、松井の報告した例では手術後無尿症を来し、レ線像にて両側尿管骨盤腔内で対称性に閉鎖されて居るのを認めたが、当時不明のままで過したのが後に同様の尿管狭窄例に遭遇したが、剖検により丁度 Vasa iliaca comm. と尿管と交叉する所にあたるが、此の部の淋巴腺転位の為尿管圧迫により無尿症を

来したものと考えられるのである。

#### 追 加 加藤篤二 (京大)

京大泌尿科にて尿管腫瘍にて腸瘻形成、腹膜炎症状にて死亡せる1例を追加した。

#### 19. 後腹膜腫瘍の1例 加藤晋造, 黒田政重, 花川功 (神戸医大)

症例は58才男子で右季肋部腫瘍を主訴とし、右腎腫瘍の診断の許に手術したが術後経過悪しく死亡した。剖検により後腹膜腔の神経節より発生したと思われる腫瘍で廻腸部に転移巣を認めた。組織学的に腫瘍組織は血管に富み、腫瘍細胞の核は稍不規則で円形或は多角形でほぼ淋巴球大で血管を中心として集団をなし、腫瘍細胞間に格子繊維の増殖を認める。それら腫瘍細胞の周辺には紡錘形の細胞浸潤を波状に認める。以上の組織像から Neurofibrosarcoma と思われる。

#### 20. 膀胱癌に対する膀胱部分切除の経験に就いて 金沢稔 (和歌山医大)

最近に於ける膀胱腫瘍治療の遠隔成績をみると、腫瘍が深く筋層に浸潤するものは全割を行つても遠隔成績が悪いが、限局性の、筋層に余り浸潤のない初期に部分切除を行うと甚だ遠隔成績がよいという結果が出ている。吾々は最近尿管癌1例、膀胱乳頭状癌3例に対し部分切除術を試みた、後者の内2例は尿管口附近のものであつたが之に対しては尿管口を含めた膀胱部分切除と尿管膀胱再吻合を行つた、1) 46才♀、尿管癌又は膀胱乳頭状癌。中臍靱帯を含める腫瘍切除及膀胱部分切除。剔除標本  $40\text{g}$ ,  $5 \times 5 \times 4\text{cm}$ . 組織診断。ムチン分泌軽度なる尿管腺癌。2) 54才♂、膀胱乳頭状癌にて膀胱部分切除。剔除標本  $12\text{g}$ ,  $4 \times 3 \times 2\text{cm}$ . 3) 66才♀、膀胱乳頭状癌にて膀胱内膀胱部分切除及尿管膀胱新吻合。剔除標本  $11\text{g}$ ,  $3 \times 3 \times 2\text{cm}$ . 4) 52才♂、膀胱乳頭状癌にて膀胱内膀胱部分切除及尿管膀胱新吻合。剔除標本  $13\text{g}$ ,  $4.5 \times 3.5 \times 2\text{cm}$ .

第1例は術後6カ月の現在何等自覚症なく、第3, 4例は現在入院中であるが経過は満足すべきものである。第3例は術後6日目患者がスプリントを抜いた為治療が遷延した。

#### 質 問 田村峯雄 (大阪市大)

膀胱三角部とその附近の部分切除に於ては術後排尿障害はないか。あればその排尿障害の程度如何、

#### 答 金沢稔 (和歌山医大)

吾々の例は腫瘍の部位が三角部にあつたものはな

く、従つて三角部は殆んど切除しなかつたので排尿障碍の認められたものはなかつた。

## 21. 睪丸腫瘍の2例 前川正信, 橋本誠一(阪大)

1) 31才♂, 昭和28年4月左睪丸の疼痛性腫脹に気付き同年7月7日剔出, 組織学的には Seminom. 理学的諸検索で転移をみとめず, 現在生存. 2) 46才♂, 昭和28年初旬右睪丸部の疼痛性腫脹に気付くもそのまま放置. 同年12月当科入院, 剔出したが組織学的には Seminom. 同年末退院したが, 29年1月中旬より発熱をくり返し, 頸部, 鼠蹊部, 腋窩淋巴腺の腫脹あり. 組織像は Seminom. に一致するものと考えられた. 29年4月6日死亡. くわしくは原著に記す

## 22. 睪丸セミノーマ剔出後精系断端より発生した悪性腫瘍の1例 山本弘, 石原藤太郎, 倉岡雅男 (大阪通信)

35才男, 昭和28年2月右睪丸セミノーマ兼同精系水腫にて剔出術, 精系は睪丸より約10cm上部で切断. 昭和29年初め頃から右陰囊内に再び小腫瘤の存在するのに気付き次第に増大. 一般所見に著変はない. 右陰囊内の中程から陰茎根部の高さより稍々上部に亘つて小鶏卵大, 長楕円形, 表面凹凸著明の硬い腫瘤を触れ, 上方は精系に続き陰囊皮膚との癒着は認めない. 昭和30年4月剔出. 腫瘍は精系の外鼠径輪下方約2cmの部より陰囊内にあり, 周囲との癒着は軽度. 精系は内鼠径輪まで剥離して結紮切断, 両側鼠径淋巴節の清掃を行つた. 剔出標本は, 6×2.9×2cm, 21.4g. 組織学的にセミノーマと診断された.

## 23. 特異な組織像を呈した睪丸腫瘍の1例 馬場正次, 児玉正道 (阪大)

患者は30才, 20才の時左停留睪丸で手術を受けた既往あり. 2カ月前より左睪丸腫脹, 当外来受診, 手術を行ふ. 腫瘍は手拳大, 125g, 10×10×5cm. 剖面は暗赤褐色, 粘液性, 血性で壊死状, 非常に柔く, 健康睪丸, 副睪丸の片鱗すら認めなかつた. 組織所見は比較的発達が悪い間質, 間に一層の zylinderisch の上皮性癌あり. 核も長く楕円形でクロマチンにとみ, 端の方原形質が粘液の形成を思ひしむ様に抜けて居り, 我々は papillös の Adeno-Carzinom で, それが schleimig になつたのではないかと考えて居る.

## 24. 吾が教室に於ける最近5年間(昭和25年—29年)の前立腺手術の統計的觀察 金沢稔,

三毛俊弘, 瀬川陽一, 前田行造, 的場昭三

(和歌山医大)

1950年1月より1954年12月に至る5年間に於ける後恥骨術式により手術を行つた前立腺疾患44例に就て, 年度別による泌尿器科外来総数に対する頻度, 年齢別, 年度別年齢, 職業別, 主訴, 初発症状発現より手術迄の期間, 直腸内触診所見, 尿所見(初診時及び退院時), 腎機能検査成績, 酸性フォスファターゼ, EKG, 手術術式, オキシセル使用有無, 手術時間, 輸血量, 術後カテーテル留置期間, 剔除腺腫重量, 術後併発症, 組織所見, 遠隔成績(全身状態及び性生活)等の統計的觀察を行つた.

## 質 問 田村峯雄 (大阪市大)

前立腺肥大症に於てその摘出術の Indikation を問う. 前立腺肥大症と診断したものは全部摘出するのか. 姑息的療法によつて改善せられるものも数多くあるが如何.

## 答 西村長応 (和歌山医大)

我々は排尿障碍を訴えて入院した前立腺肥大症は手術した方がよいと思う. 又排尿障碍を訴える老人は手術を希望して来院するものも半数はあると思う.

## 追 加 中尾知足 (大阪北市民)

前立腺肥大症の摘出術の適応に就ては, 患者の全身状態等は別として, 生活状態等によつて左右さる点が多い. 比較的中以下の生活状態の者では, 患者が若い間に, 又衰弱を来さない間に摘出して置くのがよい. 大きな腺腫でも比較的排尿障碍の軽いものも, レ線検査では相当排尿行為に努力をして居るのがみられる. 従つてかかる患者はやはり早く老衰に陥り易いと思はれる.

## 追 加 稲田務 (京大)

前立腺肥大症に対して保存的療法は有効ではなく, 結局は剔出術を必要とするとの説が有力に唱えられているが, 実際には保存的療法によつて自覚的症狀が長期間に亘つて消失する事はしばしば経験せられる所である. 従つて剔出術のみが唯一の治療法であるとは云いがたいと考える.

## 質 問 田村峯雄 (大阪市大)

前立腺肥大症は皆手術を必要とするものであるのか. ホルモン療法等の姑息的手段で改善されるもののがかなり含まれていると思ふがこの点如何.

## 答 金沢稔 (和歌山医大)

手術は排尿障碍の認められるものに対してのみ行っている。ホルモン療法では症状の改善は一時確かに見られる事もあるが、之は腺腫そのものに対する何等の影響も認められるものでなく永く経過を観ぬと判らぬ。本疾患に対する根本的治療が手術以外にない事は現在世界の常識である。又肥大症には潜在性前立腺癌も認められる事を思えば男性ホルモン療法を行なうなどは危険である。

#### 25 前立腺癌のホルモン療法 加藤篤二, 大森孝郎 (京大)

ホルモン療法を行い経過を観察し得た11例の前立腺癌患者について、その臨床的効果及び予後について述べた。前立腺癌患者に対する治療としては原則として診断と同時に去勢術及び Estrogen 療法(1日 0.5 mg~10mg)を使用した。尚 Progynon-depot を使用し良好結果を得た2例も報告した。

#### 追 加 加藤篤二 (京大)

女性ホルモン投与後の組織学的変化を3例について述べた。

#### 26 膀胱脱を疑わしめた女子尿道線維筋腫の1例 大島升, 植田亮 (大阪通信)

女子尿道より発生する中胚葉性腫瘍は、良性、悪性共に極めて稀有である。我々の経験した症例は外見上膀胱脱を思わしめた可なり大きい尿道の線維筋腫の1例である。症例は31才既婚、数日前に突然拇指頭大の腫瘍が外尿道口から出現した。膀胱症状、その他自覚症状は殆んどない。腫瘍は表面灰白色、乾燥角化した感じで、尿道前壁より左壁にかけて広基性に突出していて、弾力性硬。切除後尿道断端を整形縫合、術後は経過良好にて6日後には全治退院す。組織学的には線維筋腫の像を呈して、悪性化の徴なし。

#### 27. 尿道瘻形成後に発生した会陰部腫瘍の1例 大矢全節, 柳井哲雄 (国立京都)

38才の男子に発生した会陰部腫瘍で尿道瘻を形成後に発生し、尿道狭窄を伴い、腫瘍の増大と共に運動障碍を来すに至る。組織学的に確定して居ないが、軟骨腫特に混合腫と臨床的、解剖学的に考えている。文献上稀なる症例であるが、他の統計と比較して症状、原因、発生、治療等に就いて述べた。

#### 28. 経尿道的膀胱頸部切除術の奏効した外傷性脊髄膀胱の3例 山本弘, 石原藤太郎, 倉岡雅男 (大阪通信)

8例の外傷性脊髄膀胱患者に経尿道的膀胱頸部切除術を施行し、内3例は唯1回の切除後驚く可き膀胱機能の改善を示したので報告する。1). 22才の男子。第1腰椎脱臼骨折、Conus 部の不完全損傷。主訴は溢流性失禁。術後2週間目より膀胱機能回復の兆が見え、6週後には溢流性失禁は全く消退した。現在残尿皆無となり、2~3時間毎に200~300ccの尿が規則正しく排尿可能となった。2). 23才の男子。第1腰椎脱臼骨折、Conus 部の完全損傷。主訴は溢流性失禁。術後7週で失禁は全く消退し、残尿もなく好都合なる自律性排尿を獲得している。3). 23才の男子。第12胸椎及び第1腰椎圧迫骨折、Conus 部の完全損傷。膀胱頸部切除数日後カテーテルの助けを借りず残尿50ccを残して自律性排尿可能となり、5週後には残尿なく、1回量300ccが3時間々隔で規則正しく排尿可能となった。

#### 追 加 中尾知足 (大阪北市民)

Myelitis transversus 後の排尿障碍にも本法はよい方法である。

#### 29. 各種泌尿器科疾患の膀胱内圧測定 後藤薫, 山崎巖 (京大)

主として神経因性膀胱等の排尿障碍のある疾患にて膀胱内圧を測定し、診断、治療の指針とした。

#### 30. 辜丸捻転症の1例 大橋一郎 (京府大伏見分院)

#### 31. 辜丸融解症の1例 藤井達郎 (大阪市大)

約10年前より陰囊水腫の既往歴のある患者で入院1ヵ月前急激に左側陰囊腫脹及び中等度の発熱、更に激しい疼痛を訴える様になり、悪性腫瘍の疑いのもとに左側腫瘤部を摘出し、切開により辜丸の存在はなく汚穢、ゲラチン様内容液を認めるのみで組織学的には出血と組織壊死を見るのみであつた。長期間に亘る陰囊水腫があり、毎々の内容液穿刺により2次の細菌感染を起し、組織壊死に落入り遂に辜丸融解した症例と考えられる。

#### 追 加 中尾知足 (大阪北市民)

23才男子、左側陰囊内容に硬結を触れると来院、副辜丸頭部腫瘍かと思ひ摘出術をせんとしたが辜丸の上1/3部が硬く触れる。故に此の部の部分切除をしたが、切除した辜丸の一部をホルマリン水に入れて置いた所、数ヵ月で融解して無形の状態となった。依つて組織学的所見は得られない。さて一方患者は約2年後

来院せるに残した左睪丸の下 2/3は全く消失して左陰囊内には何物も認められなかった。

### 32. 尿失禁に対する Lowsley 手術の 1 経験

馬場正次, 中尾正敏 (阪大)

23才, 未婚の女子, 先天性の膀胱括約筋の緊張不全によると思われる比較的尿失禁に対して Lowsley の Ribbon gut を用いる尿道整形術を行い, ほぼ満足すべき効果をえた。本法は手術的侵襲が少く比較的簡単な方法で良好な結果をえたので報告した。

### 33. 高比重ヌベルカインによる腰椎麻酔 稲田

務, 後藤薫 (京大)

0.25% 高比重ヌベルカインにより腰椎麻酔を行つた泌尿器科手術55例に就いて, その麻酔効果を述べた。詳細は原著参照 (日本臨床13巻9号)。

### 34. キシロカインによる仙骨麻酔 稲田務, 後

藤薫 (京大)

新局所麻酔剤 2%キシロカイン及び 2%キシロカイン-エピレナミンにより仙骨麻酔を行い膀胱鏡検査等

の泌尿器科的検査, 治療に対する麻酔効果を述べた。詳細は原著参照 (臨床皮泌 9 巻 8 号)。

### 35. 精囊腺単独摘出術並びに尿管形成術の 1 新法

石神襄次 (京大)

精囊腺摘出術は最近前立腺摘出術の進歩と共に各方面に於て可成頻繁に行われる様になつて来た。然し大部分は前立腺, 精管等と共に搬出される場合が多い。腫瘍の場合を除き, 精囊腺のみに病変の限局した場合, 前立腺, 精管を其の儘残置せしめて精囊腺のみを摘出する事は, 予後の経過から考えても良好なるは云うまでもない。最近出血性精囊炎及び精囊憩室の患者に対し精囊腺のみを摘出し, その内 1 例に於ては後の精液検査に於て精液中に精子を認め得たのでその術式を述べた。尿管末端部の狭穿及びそれによる結石形成, ひいては水腎症, 尿管拡張症の併発は我々のしばしば経験する所である。我々は尿管上部よりネラトンカテーテルを膀胱に向つて挿入留置し手術創は一次的に縫合を加え, 術後 7~10日を経て Young 氏異物鉗子により経尿道的にカテーテルを抜去する方法により狭窄整形に成功した経験を得て報告した。